

**医学教育シリーズ**

2023年度近畿大学医学部ロンドン研修プログラム (Imperial College London (Chelsea and Westminster Hospital)) に参加して

貴島 芳香 中根 大周

近畿大学医学部医学科4学年

1. はじめに

私たちは2024年3月12日から25日まで約2週間、イギリスロンドンにあるChelsea and Westminster Hospital (以下, CWH) にて実習を行った。今回の海外研修プログラムは、近畿大学医学部が推進する事業であり、各派遣先との間での人的交流を通じ、将来を担う人材を育てることを目的としている。コロナ禍で一時的に中断していたが、昨年より再開した。

2. 研修について

1日の流れ

CWHはロンドン西部の閑静な住宅街に隣接している。窓からは近隣の住宅の庭の木々が眺められ、ロンドン中心地へのアクセスが良いにも関わらず、とても落ち着いていてリラックスできる環境であった。また、中に入ると明るい吹き抜けの空間がありショッピングモールのような空間があった。無機質になりがちな病院の廊下は子供達が描いた絵で彩られ、時折ロビーではピアノの演奏会が開かれていた。病院の中にはチャペルや患者が無料で利用できる映画館もあり、病院での生活に彩りをもたらす工夫が随所に施されていた。

私たちは小児外科チームに参加した。スクラブに着替えたうえで集合し、毎朝8時過ぎからミーティングルームで当直の先生から申し送りが行われた。私たちは議論内容を理解しようと必死に耳を傾けていたが、慣れないイギリス英語、飛び交う医療英語や略語に苦戦した。医師は皆、患者たちにベストを

尽くせるように知恵を絞っていた。もちろんその姿勢は日英共通のものであった。申し送りが終わるとすぐに回診へ向かった。多人種国家であるがゆえに英語を母国語としない患者もたくさんおり、患者が不安なことや気がかりなことを遠慮なく話すことができるよう、わかりやすい言葉を使って今後の方針について説明を行っていたように感じた。

回診の後には日によって異なるが外来見学をしたり、レクチャーをうけたり、患者に対して術前の問診をしたりした。

外来見学では、日本では医師は声で患者を診察室に呼ぶが、CWHでは医師自らドアをあけ、患者を診察室に招き入れていた。患者が入室する際に医師は必ず挨拶と自己紹介をし、少しでも患者とその家族の不安を和らげるように努めていた。私たちもそれに倣って日本からの留学生ですと自己紹介をすると、ほとんどの保護者から興味を持たれることが多く、とても居心地のいい時間を過ごすことができた。診察は一人一人時間をかけて行われ、質問に丁寧に答えている印象があった。保護者の多くは学生がいることに寛容で、鼠経ヘルニアの患者の例では、先生が診察台の上で触診する様子をよく見える位置へ誘導していただいたり、学生は学ばなければいけないからと積極的に触診する許可までいただいたりした。

レクチャーは新生児の腹壁破裂 (abdominal wall defect) について行われ、Imperial College Londonの学生、イタリア人留学生とともに受けた。現地の学生は先生の問いかけに答えるだけでなく、わからないところを積極的に質問しており、自ら能動的に

学びにいく姿勢がとても印象的だった。

術前の問診では、始めこそ何から話せばいいかわからず慌てたが、外来見学で先生がしていたことを思い出し、慣れない英語で病態に沿って質問をした。この時も非英語圏の留学生であることを伝え、質問に対して簡単な単語を用いてわかりやすく返答してもらえたおかげで、なんとか必要十分な情報を聞き出すことができた。

そして午後からは手術見学があった。小児外科の医師たちは医局で待機しており、患者の麻酔導入が終わると電話がかかってきてオペ室へ向かった。横隔膜ヘルニア、鼠径ヘルニア、臍ヘルニア、包茎手術、精巣捻転など様々な手術を見学できた。手術室のスタッフは東南アジア系の方々が多く、サインイン、サインアウトの時は慣れないアクセントのためほとんど聞き取れなかった。腹腔鏡手術(laparoscopy)や内視鏡的食道異物摘出術以外は、ガウンを着て糸切りや術野の確保を手伝い近距離で見学ができた。日本では消化器や泌尿器の先生が分担して行うような内容であっても、小児外科の先生は臓器に関係なく手術を担当され、子供の体に残る手術痕をできるだけ小さくしようと心がけていた。英語での説明と指示を理解しながら見学するのは気力が必要であったがとても有意義であった。

印象に残った症例は新生児の横隔膜ヘルニア(diaphragmatic hernia)である。始めは腹腔鏡にてヘルニア孔を探していたがそれが横隔膜にあることわかり、いったん手術を中断したのち、胸腔鏡手術に移行した。翌日にその症例の胸部レントゲン写真を見ながら、指導医からチームに向けたレクチャーがあった。横隔膜ヘルニア(diaphragmatic hernia)以外にも空腸瘻造設(jejunostomy)の話もあった。どれくらい理解しているかホワイトボードを使って説明するよう言われとても緊張した。ヘルニア孔から腸管が胸腔内に脱出することで肺が押しやられ普通の大きさに成長できないため、術後はNICUにて厳格に術後管理がされていた。NICUでの回診では小児科医とともに行われ、なかなか見ることができない貴重な機会に遭遇できた。

日英の違い

研修を行う中で様々な日英間の違いを主に3つ発見することができた。まず一つ目は病棟と病室である。病棟にはSaturn wardと名前があり、宇宙をモチーフにした絵があちらこちらに貼られていて子供が飽きない工夫がされていた。病室には子供用ベッドの横に大人用ベッドが用意され、患者は親と一緒に過ごせるようになっていた。二つ目はカン

ファレンスでの飲食である。ご飯やスナックを食べながらリラックスした雰囲気で行われており大変驚いた。そして三つ目は患者の人種の多様さである。宗教や文化的背景を踏まえた上で診療計画を立てていた。特に印象的だったのはアフリカ出身の患者とイスラエル出身の患者である。前者は宗教的理由で包茎手術をするいわゆる割礼を希望しており、後者は宗教に非常に厳格なため自分の子供が男性器を手術されるのをためらい最終的には手術中のビデオを要求していた。患者のバックグラウンドを考慮し、尊重することの重要性について考えることができた良い機会であった。

3. 放課後・休日

研修は8時と比較的早く開始する代わりに、終わりの時間が全日を通じて早かった。15~16時に終わる日もあれば、先生方が資料作成で多忙の時は13時で帰る日もあった。CWHを後にする際、ほぼ毎日のように先生方に「今日はどこに行くの?〇〇がおすすめだよ」と親切に観光スポットを教えていただいた。CWHの目の前にあるバス停から赤いロンドンバスに乗ってSouth Kensington 駅へ向かい地下鉄に乗り換えた。駅は御堂筋線のように主要地を通るPiccadilly lineと中央線のように東西に走るCircle and District lineが通っておりアクセスはとても良かった。バッキンガム宮殿、ウェストミンスター寺院、大英博物館など中心地にある観光地はも



吹き抜けのある明るいロビー

ちろんのこと、少しはずれにあるグリニッジ天文台も訪れた。大英博物館で見た「ライオン狩りのレリーフ」は世界史の教科書で見るより何倍も躍動感があり、本物を生で見ることの素晴らしさを実感した。その他にもミュージカル鑑賞、アーセナルスタジアムでサッカー観戦、王室御用達 Fortnum and mason のアフタヌーンティーとイギリスならではの体験もした。また一緒に実習をしたイタリア人留学生と仲良くなり、ビッグベンと一緒に写真を撮ったり夜にはパブに行ったりした。週末にはその留学生に誘われて、アイルランドにキリスト教を広めた聖パトリックをたたえる St. Patrick's Day の祭りに参加した。毎年3月17日にアイルランドにまつわるものをたたえる祭りとしてパレードが世界各地で行われ、日本では馴染みのない祝祭日であり、とても新鮮で異文化を学べる良い経験が出来た。

4. 統 括

2週間と限られた研修期間の中でたくさんの貴重な経験を積むことができた。1週目は慣れない海外生活や文化の違いに苦戦はしたものの、2週目は自分から積極的に質問もできるようになり充実した時間を過ごせたと思う。毎日ホテルに帰った後は、カンファレンスで分からなかった単語や内容を調べて自主学習したことが功を奏したと思う。イタリア人留学生は私たちと同じ学年であり、同じく英語を母国語としないにも関わらず、非常に英語力が高く医学英語もたくさん理解していたため、先生たちの会話の内容のほとんどを聞き取れていた。そのレベルの高さに感銘を受け、今後の勉強に対するモチベーションが以前と比べてより高まった。

海外からの観光客が増えている日本において今後医師として働くにあたって、学生のうちから多国籍・多文化における医療に関し身をもって経験でき

たことは非常に大きな糧となったと思う。この貴重な経験を活かしてこれからも勉学に励もうと思う。

5. 謝 辞

今回の海外研修の機会をくださった、近畿大学医学部教育センターの藤田 貢先生、Chelsea and Westminster Hospital Consultant Pediatric Surgeon の Amulya Saxena 先生、Pediatric Surgery Team の皆様、学務課の東 美香さん、大黒昂汰さん、その他お力添えいただいた多くの方々に改めてお礼申し上げる。



病院の玄関



Saxena 先生(右)と同僚の Rashimi 先生(左)と医局の前で